

## 詩語表の見方・使い方(初心者) N

漢詩をはじめた頃は、詩語表の見方さえよく分からなくて大へん困った思い出が残っていますので、詩語表を“初めて見る”入門者の方が少しでも戸惑わないようにと思って書いてみました。

他にも入門者が知っておいた方が良いことがたくさんあると思いますので、伝えるためには文書化しておいた方が良くないでしょうか。既にどこかに書いたものがあると思いますが、無くても口頭から書き写しますので教えて下さい。頭の中にしか無いことも、この機会に文書化してまとめませんか・・・

参考本を見ながら気が付いた点を整理していただいただけなので、ご意見とご指摘をお待ちしております。

「必ず漢和辞典で確認することを忘れないように！」と言われている・・・  
いつまでも初心者の 南部素愚より

### ○詩語表の利用

「詩語表」には、まず○○と●●に分けて二字の言葉が集めてあります。

七言絶句の一句は、二字・二字・三字と句切ることができますから、句を仕立ててゆくときにも、二字・二字・三字と言葉を置いてゆくわけです。

・詩語表の**二字の言葉**の欄を見ると、  
○○のところでは、第一字目の漢字に、「●」のしるしがついているものがあります。これは、○○のなかに入っている、●○の平仄の言葉だということです。  
同じように●●の欄を見ても、やはり第一字目の漢字に、ところどころ「○」がついています。これは、○●の言葉であることを示します。

・それぞれの句の頭に、**二字の言葉**を二つ持ってくるのですが、  
一字目と三字目は「一三五不論」ということがあり、多くの場合平仄どちらでも構わないので、詩語表では二字の言葉の下の漢字の平仄によって整理してあるのです。

・詩語表には、次に**三字の言葉**が韻目ごとに分類して並んでいます。  
これも●○◎と●●◎に分けてありますが、一番上の字はやはり「一三五不論」で平仄が自由になることが多いので、ところどころに「○」のしるしがついています。

・**三字の言葉**の欄の最後に、  
**転句(第三句)**の末尾に用いる言葉が、○●●と○○●としてまとめてあります。  
平起式の転句のように、最後を●○●とすることもありますので、そのときに使う候補として、○○●の項にやはり「●」のついた言葉が入れています。

## ※補足説明

詩語表を利用して、詩に作り上げようとしている自分の心持ちにかなない、かつ平仄式にもかなっていない言葉を選び出していきやり方は、習作を積み重ねてゆくことによって、平仄や韻を整える技能や基本的な詩語の知識が、次第に身についていくと言われています。

**ただ、詩語表を使いだした早い段階では、何度詩語表をくっていても、自分の描こうとしている情景に合った言葉がどうしても出てこないという壁にぶつかるでしょう。**

それは当然で、いろいろな本に添えてある詩語表はごく一部で、各人が必要とする言葉を全て網羅しているわけではありません。過去にも、漢詩を作るための詩語集はたくさん出版されていますが、膨大な数の詩語をおさめている大型の詩語集にしたところで、たしかに言葉の数は多くなってもあらゆる作詩家を満足させるような、あらゆる詩語が集めてあるということではありません。

それよりも、限りある詩語表を限りなく活用していただくための二、三を補足しますと。

・詩語表では、たとえば春・夏・秋・冬・雑などの部に大きく分類し、それぞれの部がさらにいくつかに分けてありますが、春の詩だから春の部の言葉を使わなければならないということではないのです。どこの部からもってこようと、詩情や詩景に合うものならば、いっこうに構わないのです。

そうすると、詩語表の部立ては、なんら実質的な意味を持たぬことになってしまいますが、そのとおりで詩語表全体、どこからでも心にかなう詩語を求めればよいのです。

ただ、全く部立てをなくしてしまうと、初めて作詩にとりかかった人には、詩語の山を前に立ちすくみ、どこからとりついてよいのか分からなくなるといけないと思い、最小限の分類だけを残しています。

・韻字を最後に持ってくる三字の言葉でも同じことで、他の部においてある先韻の語例も参照して見る必要があります。詩語表では、どこに置いてある先韻の言葉も、同じ先韻どうしである以上、どこから持ってきて一つの詩のなかに使うことができるのです。

・転句に用いる三字の言葉も、

それが詩語表のどこに置かれていても、すべて通じて使うことができるのは言うまでもありません。

次に、詩語表を使ううえで、もう一つ、どうしても心得ておきたいことがあります。

たとえば、「秋の部」の書感のところには、このような二字の言葉が並んでいた場合には、「客舎」とか「孤客」などによって、客の字は仄声だと分かります。そうすると、この表に載っている以外でも、「旅客」「醉客」「詩客」「仙客」「墨客」「刺客」「政客」「作客」など、いくらでも言葉が作れます。

そして、それらの言葉は、平仄式で●●のところなら問題なく使えるわけです。

同じように、詩語表の「郷園」から、園の字が平声だと分かりますから、やはり「故園」「菜園」「田園」「薬園」「小園」「庭園」「花園」「家園」など、●●のところの置ける言葉が無数に考え出せます。

もし、孤平を避けるために上の字の平仄を調べておく必要があるというのなら、その段階で字書を引いてみればよいわけです。

・もう一度、平仄式を見ると、各句の一字目と二字目は、すべて●○か●●の型で、しかも孤平にはまったく関係しませんので、各句の頭に置く二字ならば、上の字の平仄を調べることもないのです。

・韻字を必要とする三字の言葉でも、同じことが言えます。

先韻の字を末尾にする少ない文字群からでも、さらに「百花辺」「百花眠」「落花辺」「対樽眠」「垂柳鮮」「白日天」など、新たな組み合わせによって、押韻部分の候補をいくつも工夫することができるのです。

また、詩語表の「白日眠」から、眠の字が先韻だと分かっているならば、さきほど考えついた「旅客」以下の言葉と結びつけて、「旅客眠」「醉客眠」「詩客眠」「仙客眠」「墨客眠」「刺客眠」「政客眠」「作客眠」など、よりいっそう押韻の幅を広げることが可能です。〈Q〉

このように、少ない詩語表のなかにも、実際は目に見える数十倍、数百倍もの詩語が含まれているのです。

それに気づいて、十分に詩語表を活用してゆくならば、自分の詩想にかなうような言葉が載っていないなどと嘆くことは、工夫の足らぬことを自ら告白するに等しいのです。そして、詩を作る楽しみは、実はそうした工夫のなかにこそあるのではないのでしょうか。